

～ 日本看護系学会協議会連携事業 ～
公益社団法人日本看護科学学会 平成25年度 災害看護支援事業

事業完了報告書

東日本大震災および福島原発事故
により茨城県に避難している母子
の支援活動

事業運営団体名称： 震災母子支援「とらうべ」

所属機関： 茨城キリスト教大学

代表者名： 渋谷えみ

■ 事業内容

事業の内容、手法、場所、対象者とその人数などを具体的に記載すること。

1. 震災母子支援「とらうべ」活動に至る経緯

首都圏の5つの大学が中心となり開始した「福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト」の茨城チーム（図1左）として支援を開始した当時（2011.7）は、茨城県も被災しながら被災三県からの避難者受け入れに混乱している時期でもあった。福島県から茨城県内へ流動した避難者数は、2011年7月の時点で約2000人超、約700～800世帯であった（原口,2012）。

自治体も避難者の把握に苦慮している中、「子育て中の仲間をほってはおけない」という思いから、伝手をたどり口コミで開始した小さな「茶話会」が支援の発端であった。特に茨城県は生活商業圏を共有している隣県でもある福島県からの避難者が多く、夫は仕事の関係で福島に残り、母子だけの避難者が目立ったのも特徴といえよう。さらに、家族が原発関連の仕事に従事しているが故、東海原発のある茨城県に職を求めて避難をしてきたという家族も少なくなかった。原発事故の収束も不明であったため、人によっては、避難するに至った複雑な事情や心情を茶話会で話せる環境にはなかったのも事実であった。

当初、私たち支援者が茨城県内をキャラバンのように廻りながら茶話会を開催し、その時々状況やニーズを伺い、受け入れ自治体へのアドボカシー活動を行ってきた。物資配布会を開催したり、ブログを立ち上げ情報発信も行った。原発補償問題には茨城県弁護士会の協力が得られ、毎回、個別に女性弁護士に対応して頂き、避難者ならびに支援者対象の勉強会も開催した。しかし、避難が長期化することで問題は複雑多様化していったことは否めない。その状況下でも、県北、県央、県南地域に茶話会に参加した母親の中から自助グループが立ち上がったことは何よりの成果と考える。そして、これを機に県内避難者が未だに多い、県北地域に活動拠点を置き「とらうべ」（注）として避難母子支援活動を開始したのが経緯である。人口流動の変動は若干あるが2014年3月現在も約3,700人（2014.1現在）が茨城での避難生活を余儀なくされている（図2）。

茨城キリスト教大学 渋谷・礪山研究室に「とらうべ」事務局を置き、今まで構築してきた連携・協力団体とも繋がりながら、4団体（図1右）との連携を主軸に活動を行った。

（注）助産師が昔から使用していた胎児心音を聴取する器具。耳を澄ませなければ聴くことはできないことから、母子の声に耳を傾けようという意味で団体名を付けた。

福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト

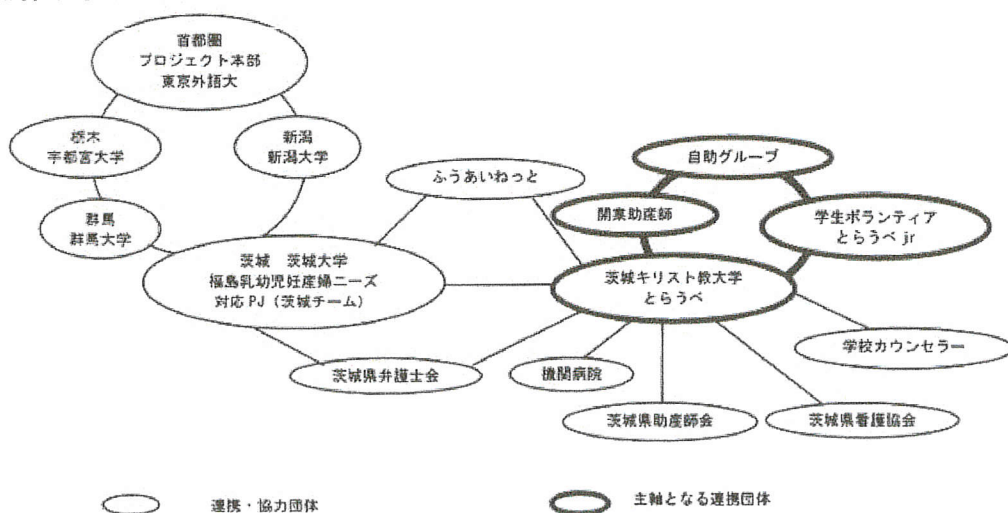


図1 とらうべを中心とする母子支援体制ならびに協力・連携団体

注1) 茨城 NPO センター・コモンズ内 福島避難者支援ボランティア団体
注2) 福島県内小学校に派遣されている学校カウンセラー（兼看護師）

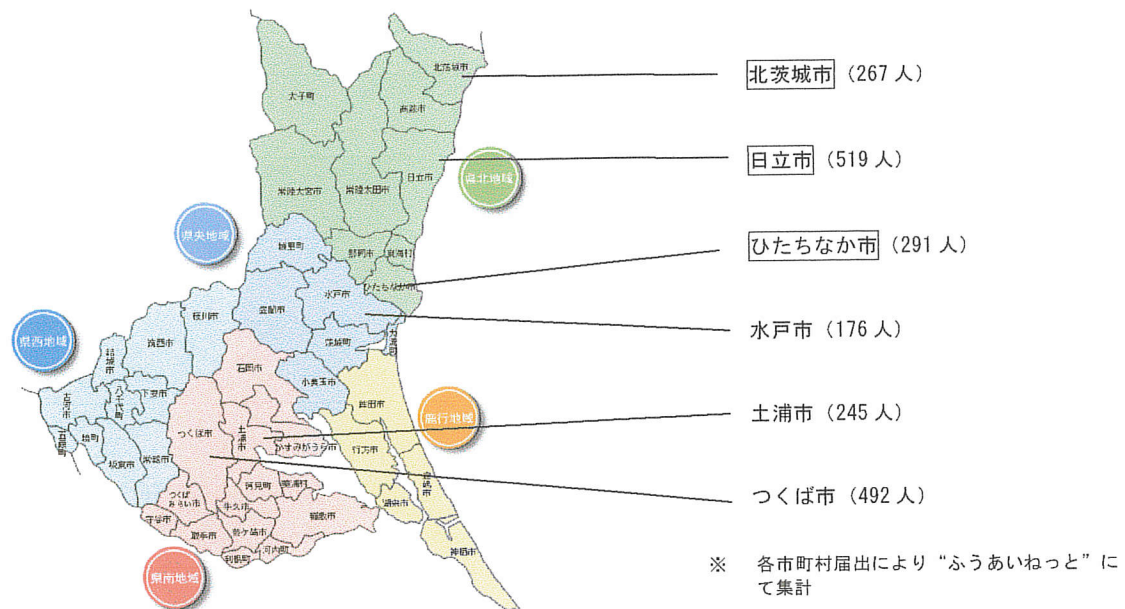


図2 福島県からの避難者数（2014.1.16現在）

2. 実施内容

主な活動を以下4点とし、表1に示す事業を展開した。

- 1) 「とらうべ（注）の会」（イベントの開催）
- 2) 自助グループならびに避難者自立支援
- 3) 電話相談
- 4) 震災復興イベントの開催

表1 事業内容一覧（助成期間 2013年5月～2014年3月）

日時	内容	開催場所	参加人数	資料
2013				
5/21	Happy メイクレッスンボランティア①	茨城キリスト教大学	6名	1
6/4	Happy メイクレッスンボランティア②	茨城キリスト教大学	4名	2
6/18	Happy メイクレッスンボランティア③	茨城キリスト教大学	5名	
6/24	避難者自立支援のための依頼	茨城県立医療大学	5名	
6/27	常陸太田市子育て事業 メイクレッスンボランティア	あおぞら助産院 (常陸太田市)	4組 (8名)	
6/29	とらうべ遠足会	かなさ笑楽校(常陸太田市)	70名	3
7/10	Happy メイクレッスンボランティア④	日立市総合福祉プラザ	4名	4
7.29 ~ 30	震災メイクボランティア	原町保健センター (南相馬市)	8名	5
8/10	連携団体調整会議	茨城キリスト教大学	12名	
8/31	野外パーティ	茨城キリスト教大学	48名	6
9/27	Happy メイクレッスンボランティア⑤	茨城キリスト教大学	5名	7
11/6	0歳児の広場 メイク教室①	日立市保健センター	132名 (66組)	
11/16	芋煮会	茨城キリスト教大学	50名	8
11/27	Beauty メイク室 ボランティア	茨城キリスト教大学	4名	9
12/4	0歳児の広場 メイク教室②	日立市保健センター	96名 (48組)	10 (予告)
12/21	クリスマス会	茨城キリスト教大学	62名	11
2014				
3/9	震災復興イベント	総合福祉施設ゆうゆう 十王 Jホール(日立市)	約300名	12
3/10	連携団体調整会議	茨城キリスト教大学	10名	

1) 「とらうべの会」(イベントの開催)

連携団体の自助グループが開催する「被災者ママの会」は1回/1~2ヶ月に開催しており、当初は「とらうべの会」と「被災者ママの会」が並行して開催されていた。参加者が同じことも多いため、毎月開催していた避難母子を中心とした交流会「とらうべの会」を参加者の希望を取り入れ、イベント開催とした。また、避難生活が長期化することでの弊害もあるが、幼児や学童期の子どもを持つ世帯では就学を中心とした生活が落ち着いてきた時期でもあり、地域でできた友人との参加希望もあったため、参加者は避難家族に限定せずに地域母子とのネットワーク拡大も意図しながら企画運営を行った。

「遠足会」(6月)、野外パーティ(8月)、芋煮会(11月)、クリスマス会(12月)を開催した。遠足会では常陸太田市と連携することで、地域の方がボランティアで参加するなど場を盛り上げてくださった。「野外パーティ」、「芋煮会」、「クリスマス会」は連携の学生団体「とらうべ Jr.」が中心となり企画運営を担い、所属施設大学の協力も得ながらイベントを開催した。リピーター家族も多く、地域で新たにできた友人家族も参加するなど地域コミュニティが拡大していることが伺えた。

【遠足 6月】



竜神橋



ピザ焼き体験



クイズ大会

【野外パーティ 8月】



スイカ割り



バーベキュー準備も一緒に



皆で美味しく頂きました

【芋煮会 11月】



準備は子ども達と一緒に



託児スペース



一人ひとりを大切にに関わります

【クリスマス会 12月】



クリスマスリース作り



聖歌隊の歌に癒されました



ケーキも皆で頂きました

2) 自助グループならびに避難者自立支援

福島より避難している母親（古内杏奈氏 IBF（国際美容連盟）認定 国際メイクアップアーティストライセンス「メイクボランティアチーム ～LOVE for earth～」代表ならびに自助グループ「被災者ママの会」代表）の後方支援を行った。

古内氏が開催する「Happy メイクレッスン」のメイクならびに託児ボランティアとして、とらうべ Jr. と連携しながら6回にわたり活動を行った。その他に常陸太田市の開業助産師が主催する子育て支援事業でもメイク教室を開催した。さらに、日立市保健センターで開催している「0歳児の広場」では2回シリーズで乳幼児のスキンケアを中心とした教室を開催し、多くの母子の参加があった。参加者アンケートでは「慣れない育児に疲れていたが自分自身にも関心が向いた」「親同士のコミュニケーションがとれてよい」など反応は好評であった。

古内氏の避難元である福島県南相馬市の原町保健センターでもメイクボランティアを実施した。加えて一人ひとりお話を伺いながら疲れた心身の癒しにつながればとハンドマッサージを提供した。参加者からは仮設住宅での開催希望がありその後もメイクボランティアを継続している。



メイク教室（日立市保健センター）



ハンドマッサージ



メイクボランティア（南相馬市原町保健センター）

3) 電話相談

避難者は「とらうべの会」で参加者同士、自由に近況などを語り合いながら情報交換を行っている。必要時、我々は専門家としての意見を求められることもある。状況に応じて個別の相談を受けながら対応が難しいケースはなるべく早い段階で関係機関へつなぐようにしている。

子どもが学校に馴染めない、いじめにあったという相談も少なからずあったが、どちらかという学校の受け入れ体制がよく、避難所や親戚、知人宅を転々としてきた避難者にとってはやっと安心して通学できるようになったといった反応が多かった。最近では将来を見据えて就学を避難先で検討

したほうがよいのか、または避難元に少しでも近い場所を選択したほうがよいのかといった相談も聞かれている。一方で、精神面での相談も多く、状況に応じて病院等を紹介するなど対応を行っている。(2名が心療内科、カウンセリングに通院し薬物治療を継続中) また、虐待への移行が予測されたケースは保健センターへの相談を勧め実際に本人が出向いたこともあった。

とらうべ事務局として携帯電話を契約しており、face book、ふうあいねっと(注1)などを通して電話番号を告知している。また、申請者が所属する茨城県助産師会でも助産師何でも相談の電話を開設しており、求めに応じて対応している。

4) 震災復興イベント

3月11日に合わせ、様々な団体に協力を頂きながら「震災」をテーマにしたイベントを開催している。初年度はワークショップを、昨年はコンサートと講話のイベントを2回にわたり開催した。今年は昨年好評だったコンサートに加え、東京高円寺の飛鳥連の方々に協力を頂き、阿波踊りで「皆で元気になろう」という趣旨でイベントを開催した。コンサートは地元の機関病院である日立製作所日立総合病院職員で構成されるアマチュアバンドと同じく地元で活躍するコーラスグループにご協力を頂き、心温まるコンサートであった。震災復興をイメージして作られたオリジナル曲を皆で合唱した。

阿波踊りの起源は、先祖の魂を鎮めることに起因する日本三大盆踊りの一つでもあり、海で亡くなった家族を弔いという意味もあるという話を伺い、震災被害にあわれた方の供養の意を込めて踊って頂いた。最後は避難者を含め300人ほどの参加者も踊りに参加し、会場と一体となり幕を閉じた。

幼い子どもから高齢者までを対象にしているため、会場にはキッズコーナーも設け、コンサートでは珍しい子どもたちの声も聞こえてくる暖かな雰囲気の家となった。



第1部コンサート(モンキーポッド&アンサンブルローゼ)

第2部 阿波踊り(飛鳥連)

会場では母子も一緒に一踊りの輪へ

<写真掲載の許可済>

■ 事業成果

できるだけ具体的に記載すること。

1. 茨城キリスト教大学学生ボランティア団体「とらうべ Jr.」との連携

「とらうべ Jr.」は、震災直後に「福島乳幼児妊産婦ニーズ対応PJ 茨城チーム」として活動していた頃から、主に託児ボランティアとして参加していた筆者が所属する大学の看護学生たちである。学生はゼミやサークル活動の一環ではなく茶話会等の開催に合わせてボランティアとして募っていたこともあり、その場限りの参加も多く、継続性や学生同士の繋がりという観点からは効果的ではなかった。

2012年10月、大学内に「とらうべ」事務局が置かれ活動拠点が移ったことで、キャンパス内でのイベント開催が増えていった。学生たちが参加者からの声を聴いたり、子ども達の成長を身近に感じることで「自分たちも企画運営をして支援をしていきたい」という思いが内発され、2013年4月、「とらうべ Jr.」が発足した。ボトムアップで作られた団体は勢いがあり、大学内の学生企画奨励金、日立市連携学生プロジェクト助成を獲得し、大学内外の協力を得ながら、学生ならではの発想で野外パーティ、芋煮会などを企画運営するに至った。さらに、実習先の日立市保健センターと連携しながら、避難している母親とともにメイク教室を企画し、託児ボランティアを行うなど活動の場を広げていった。現在では、避難母子と地域母子をつなぐ試みで、地域に密着した活動を展開し地域の活性化に取り組んでいる。

企画ごとのリーダーを中心に運営を行い、助成金も自分たちで計画的に運用していった。参加者からの生の声は学生たちにとって何よりの動機付けとなり、充実感、達成感に繋がっていたことが伺える。この一連の過程はPDCAサイクルに通じており、学生たちの自信につながったと考える。

とらうべ Jr.に所属する学生61名にアンケートをとった結果（回収率40名65.5%、有効回答率ともに100%）、今までにボランティア活動をしたことがない学生が半数以上であったが、本活動を通してボランティアの意味がわかったと回答している学生が8割以上を占めた。さらに『震災時の生の声を聴くことで、どれだけ恐い思いをしたか、今どうしたいかなど気持ちが理解できる。前を向こうとする避難者の姿に感銘を受け、力になりたいと思うと同時に、私自身も頑張ろうという気持ちになる。』という自由記述からもわかるよう、避難者の気持ちが理解できると回答した学生が8割以上であった。そして9割以上の学生が避難者の気持ちを理解しながら支援をしていることがわかった。『何か力になりたい』『被災地でも支援をしたい』『親子と一緒に遊べる工夫』など今後の活動に対する意欲を述べている。とらうべ Jr.の中には福島県から通学している学生や自身が被災している学生もおり、『人と人とのつながりを実感』『先輩との関わりが増えて有意義な経験』などの自由記述もあり、活動そのものに価値を見出していることも継続の力となっているのであろう。

また、『教員のサポートが安心につながる』『気付かないところで配慮してもらえる』などの記述もあり、学生の企画運営であってもサポートされている安心感が学生の行動を促していることも伺えた。

表1 とらうべの活動に参加した学生の意識

項目	(n=33)				
	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	当てはまる	よく当てはまる	NA
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
「とらうべ」の活動は子どもたちの接し方に役立つ	0 (0)	0 (0)	8 (24.2)	24 (72.7)	1 (3.0)
「とらうべ」の活動はコミュニケーションに役立つ	0 (0)	0 (0)	9 (27.3)	23 (69.7)	1 (3.0)
「とらうべ」の活動を通し震災を振り返る機会となる	0 (0)	3 (9.1)	16 (48.5)	13 (39.4)	1 (3.0)
参加者(被災者)と話すことで被災者の気持ちが理解できる	0 (0)	3 (9.1)	20 (60.6)	9 (27.3)	1 (3.0)
避難者の置かれた現状やニーズが分かる	0 (0)	4 (12.1)	18 (54.5)	10 (30.3)	1 (3.0)
避難者の気持ちを十分考慮しながら支援している	0 (0)	1 (3.0)	16 (48.5)	15 (45.5)	1 (3.0)
参加者(避難者)同士がコミュニケーションを取れるよう考慮して支援している	0 (0)	1 (3.0)	15 (45.5)	16 (48.5)	1 (3.0)
会の企画運営を行う中で自分の存在意義を確認できる	1 (3.0)	7 (21.2)	16 (48.5)	8 (24.2)	1 (3.0)
会を終えたとき有意義な気持ちになる	0 (0)	1 (3.0)	12 (36.4)	19 (57.6)	1 (3.0)
学生間のつながりができる	0 (0)	0 (0)	10 (30.3)	22 (66.7)	1 (3.0)
「とらうべ」をはじめ、関係団体・部署との連絡方法が分かった	0 (0)	8 (24.2)	16 (48.5)	8 (24.2)	1 (3.0)
「とらうべ」の活動は自己実現につながる	0 (0)	4 (12.1)	14 (42.4)	14 (42.4)	1 (3.0)
「とらうべ」の活動は看護師となる上で役立つ	0 (0)	0 (0)	9 (27.3)	22 (66.7)	2 (6.1)
「とらうべ」の活動に参加したくとも時間的余裕がない	2 (6.1)	9 (27.3)	14 (42.4)	8 (24.2)	0 (0)
「とらうべ」の活動をもっと知ってもらいたい	0 (0)	1 (3.0)	11 (33.3)	20 (60.6)	1 (3.0)
「とらうべ」の活動を続けていきたい	0 (0)	1 (3.0)	7 (21.2)	23 (69.7)	2 (6.1)
「とらうべ」の活動に参加することでボランティアの意味が分かった	0 (0)	1 (3.0)	13 (39.4)	16 (48.5)	3 (9.1)

2. 自助グループとの連携

3児を抱えながら、避難先の茨城県から東京へメイクアップアーティストの資格取得に向けて通学し、自己実現に向けて一步を踏む出した古内氏の支援を行った。

メイク教室などは自己の経験ならびに活動の場の拡大を主軸としており、ボランティアの位置付けであったが、生活の自立手段として活動を開始し始めた。当初は“支援する側“される側”という関係性であったが、彼女がメイクアップの資格を取得し、自立の意思が明確になったため、我々のスタンスも自立支援へとシフトしていき、ネットワークを駆使しながら地域の母子支援団体との連携協力の橋渡しを行った。茨城県医療大学付属病院、ならびに茨城県立中央病院には、看護師、患者対象のメイク教室（古内氏を講師として派遣）開催の依頼を行い、検討中である。

現在では古内氏自ら、タウン誌の掲載などをはじめ、ショッピングモールなど身近な場所で活動の場を拡大している。この活動にはとらうべ Jr. が主に関わったが、古内氏側の「自立」への模索ととらうべ Jr. 側の「活動内容」の模索という点で、意見を出しながら“一緒に取り組む”という姿勢が、お互いの活動意欲を高めていったといえよう。

3. その他の協力機関との連携

避難者は「とらうべの会」で参加者同士、自由に近況などを語り合いながら情報交換を行っており、必要時、我々は専門家としての意見を求められることもある。状況に応じて個別の相談を受けながら対応が難しいケースはなるべく早い段階で関係機関へつなぐようにしている。福島への帰還を予定している母親からは求めに応じ、スクールカウンセラー（図1）を介して得た情報を提供している。

避難所や親戚、知人宅を転々としてきた避難者にとっては子どもたちが通学できる環境になり安心したという反応が多かった。しかし、子どもが学校に馴染めない、いじめにあった、中には学校自体が福島からの転入を拒否していたというケースもあったが、学童期の子どもを持つ世帯では一刻も早く避難先で安心して通学できる環境を求めて、自ら行動を起こしていた。

震災から3年を経た現在では子どもの学年も上がり、将来を見据えて就学を避難先で検討したほうがよいのか、または避難元に少しでも近い場所を選択したほうがよいのかといった相談も聞かれている。一方で、精神面での相談も多く、状況に応じて専門病院等を紹介するなど対応を行った。（2名が心療内科、カウンセリングに通院し薬物治療を継続中）また、虐待への移行が予測されたケースは保健センターへの相談を勧め実際に本人が出向いたこともあった。

筆者が所属する茨城県助産師会会員208名を対象に震災時の状況、母子を取り巻く環境などを調査した際、地域の開業助産師は訪問先や助産院、さらには分娩介助中に震災に遭遇しており、周辺住民の安否を確認したり、訪問をするなど自己の判断で臨機応変に行動をしていたことが明らかになった（渋谷,2012）。しかし、助産師個人で混乱していた管轄保健所に支援に行っても断られたなど同じ地域で支援に従事していた保健師との連携が円滑にしていなかったことも明らかとなったため、茨城県内で勤務する保健師6名にフォーカスグループインタビューを行い、当時の状況、課題をディスカッションした。物資不足、指示命令系統の不統一、県からの指示を仰いで支援に反映するまでの時間が長く、緊急時の対応が不備であったことなどが上位を占めていた。自身の家族との連絡も取れない状況下での勤務に疲弊していたことも明らかとなった。地域の公的機関であるが故、人々が集まり、地域住民の安否を確認し安全誘導をしなければならないことがどれほど大変な状況であったことは容易に推測できる。組織の異なる団体の連携は一足飛びにはいかないが、茨城県へ震災時の助産師会助産師の活用の申し入れをすることで、災害マニュアルのフローチャートに盛り込まれた。

とらうべ事務局のある管轄保健センターでは、事業に乗せていただき、前述した古内氏とメイク教室を開催するなど地道な方策ではあるが、顔のわかる範囲で緩やかな連携が進みつつある。災害時の連携こそ平常時からの“人と人とのつながり”が基本であることを実感している。

4. まとめ

3年余りの活動を通し避難者と接する中で、それぞれの置かれた状況も震災に関するとらえ方

も変化してきていることを実感する。しかし、福島県に限っては放射能被ばくの問題の先行きが見えず、子どもたちを取り巻く環境は依然として厳しい状況である。その中でも、被ばくを気に留めながらも帰郷する決意を固めた家族、茨城県での定住を決めた家族、被ばくを懸念し新たな地に転居していく家族など選択は様々である。しかし、決断に至る過程は容易ではなく、生活基盤が安定できる就業と就学が何より優先されることは言うまでもない。しかし、活動を通して思うことは、子どもを抱える家族は良い意味で変化しなければ生活を維持できず、柔軟な姿勢で臨機応変に対応している様子も伺える。これらの母子を支えているのは、避難先で新たにできた学校の友人であったり、ママ友であったり、隣近所の地域の方であったり、日々の生活に密着した“人とのつながり”なのであろう。「とらうべ」が震災母子支援から避難母子と地域の母子を繋ぐ役割にシフトしてきたように、被災者（避難者）は3年の時を経て地域を構成する一員となり、被災者、支援者という関係も見直していく時期にきていることを痛感する。

参考文献

- ・原口弥生(2012)：福島原発避難者の支援活動と課題～福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト茨城拠点の活動記録～,茨城大学地域総合研究所紀要
- ・渋谷えみ、礒山あけみ、小松美穂子他(2012)：
東日本大震災における妊産婦,母子の状況と助産活動：茨城県における現状から
茨城県母性衛生学会誌 ,vol.30 51-6

実施報告及びマスコミ報道

- ・2013.6 常陸太田市 face book “とらうべ遠足会”
- ・2013.7 常陸太田市市報 “とらうべ遠足会”
- ・2014.1.31 とらうべ Jr.の活動報告 茨城新聞掲載
- ・2014.3. 9 震災復興イベント 茨城放送中継
- ・2014.3.10 震災復興イベント 茨城新聞掲載

学会等・学術論文への発表状況

<学会発表>

1. 渋谷えみ、礒山あけみ、綿引寿栄他：東日本大震災および福島原発避難者の支援活動
第2報 ～茨城県県北地区における母子支援活動の取り組み～
第32回茨城県母性衛生学会学術集会（茨城）2013.6 （査読有）
2. 茨城キリスト教大学・日立市連携協定締結10周年記念講演会
2013年度学生プロジェクト 震災母子支援「とらうべ Jr」実施報告
3. 渋谷えみ、礒山あけみ、小松美穂子：東日本大震災福島母子支援の取り組み
～茨城県「とらうべ」の活動 第28回日本助産学会（長崎）2014.3
（査読有）

<論文>

1. 渋谷えみ、礒山あけみ、小松美穂子：東日本大震災および福島原発避難者の支援活動
第2報～ 茨城県県北地区における母子の支援活動～
第32回茨城県母性衛生学会誌 vol.32,2013 （査読有 投稿中）